

と勇気づけられました。

時間が余った時には全施連の全国大会の報告に当てようとその準備をしていましたが、その時間もなく紙上で報告することになりました。みな様のご協力に感謝申し上げます。次年度の研修会も計画中です。ご意見をお寄せください。

## 令和元年度 全施連 全国大会「in みやぎ」 ～ 福祉の後退を許さない 真の共生社会を目指そう ～

令和元年10月7～8日、宮城県仙台市のホテルメイクパネク仙台において、全施連第15回全国大会 in みやぎ大会が開催され、鹿施連から中村会長、前田副会長、事務局長の川畑が参加しました。全国から約320名の参加がありました。宮城県の家族会は、宮城県知的障害者福祉協会等の支援を貰い全国大会を開催されました。

特に、東日本大地震発生から復興までの報告がありました。未だ復興半ばとのことでもありました。利用者、家族や施設職員にとっては未曾有の地震被害であったが、家族や施設職員が力を合わせて頑張っていますとのことでした。



大会のテーマとして、「福祉の後退を許さない 真の共生社会を目指そう」を掲げられました。知的障害を持つわが子らは、真の幸せな生涯を送れるでしょうか。多方面からの考えで討論が行われました。1日目は、厚労省から「障害保険福祉施策の動向」と題して行政説明がありました。その後、全施連発刊の「地域共生ホーム」の執筆者である埼玉大学宗澤先生、北九州市立大学小賀先生、全施連南副理事長による講演会が行われ、「地域共生ホーム」の構成と要旨と巻末の「施設の暮らし点検シート」の背景と使い方の説明がありました。家族会においては、地域共生ホームの内容を熟知して活動することによって、利用者のより良い暮らしが実現出来ることを痛感させられました。2日目は、「知的障害者のこれからの住まいと暮らし」と題する全員参加型討論会が行われ、活発な意見交換が行われました。各施設の実情を知ることによって今後の活動に役立つ討論会でした。

### 第15回全施連全国大会 (in みやぎ大会) 決議文

- 24時間切れ目のない支援で快適に安心・安全に暮らせる障害者支援施設を目指し、グループホームの質を充実してください。
- 支援の制限に繋がる支援区分は本人に必要な支援が受けられる仕組みに変えてください。
- 安定して必要な支援が受けられる支援職員の配置基準の見直しと定員増と職員の処遇改善を急いでください。
- 知的障害者の特性を熟知し、福祉職の専門家としての施設職員を育成してください。
- 生活保護費以下の障害基礎年金の引き上げ、憲法に保障された公的責任を果たしてください。
- 障害福祉制度と介護保険制度との一体化・統合には反対します。
- 国及び地方公共団体は、知的障害者への障害福祉サービスを提供する義務を負うこととしてください。

鹿児島県知的障害者施設家族会連合会 会報

発行月 令和2年2月

発行人

鹿児島県知的障害者施設家族会連合会

事務局 〒890-0032

鹿児島市西陵7丁目30番3号

川畑岩夫 宅

TEL・FAX 099-281-9548

# かごつま家族ねっと

## 第15号

## 令和元年度 家族並びに施設職員研修会盛況 ～ 2地区支部家族会から発表 ～

令和元年度家族並びに施設職員研修会が、令和2年1月18日(土)～19日(日)の両日、霧島市のホテル京セラで開催されました。会場を埋め尽くす300余名の参加者とプログラムの多彩なこともあり、たいへん盛り上がった2日間でした。

家族と施設職員との合同研修会の開催は、全国的にもあまり例を見ない研修会であることをお聴きする度に、このような機会を設けていただいている鹿児島県知的障害者福祉協会のみな様に感謝の気持ちで一杯になります。

開会のことばの中で、福祉協会の水流純大会長より、神奈川県相模原市の知的障害者施設「津久井やまゆり園」における事件について、「命の重さに軽重はない。植松被告人に100万回言っても変わらない。地域と共生することは、経験と行動を起こすことである。そうでないと誰もが生きていける共生社会はほど遠い。この事件の真相を見守っていきたい。」などと話されました。

この研修会は、家族会も共催として参加させていただいており、家族の想いの発表や家族会員と施設職員の方々との意見交換ができるなど、家族としての情報交換のできる場にもなっています。

家族会連合会の中村俊久会長より、家族会連合会の全国大会や鹿児島県の研修会の様子の報告がありました。昨年10月7～8日、

「福祉の後退は許さない!～真の共生社会を目指そう～」というテーマで宮城県仙台市において、「全施連全国大会 in みやぎ」が開催され、全国から家族会員約320名、鹿施連から3名が参加し、厚労省の行政報告、東日本大震災復興報告、昨年8月、全施連が発行した「地域共生ホーム」の執筆者らによる記念講演、討論会等のことを報告されました。「地域共生ホーム」を熟読して施設職員の方々との話し合いの場を設けて貰いたいことや大会決議では、「24時間切れ目のない支援で快適に安心・安全に暮らせる障害者施設を目指し、グループホームの質を充実してください。」など7項目を決議し、関係機関に要求することを共通理解しました。

また、令和元年11月8日、ハートピアかごしまにおいて、講師に全施連副理事長で「地域共生ホーム」の執筆者でもある南守氏を招き、鹿施連研修会を開催したところ、水流純大福祉協会





長、花木千鶴県手をつなぐ育成会理事長、鶴丸明人県議会議員、施設職員、家族会員など約100名の参加があったこと等の報告がなされました。

研修Ⅰの「家族として思うこと」では、鹿児島市地区支部の吉野学園家族会の末川光洋さんは、「家族の絆と施設への要望として『信じています。』と北薩摩地区支部の川内なずな園保護者会の宮司礼子さんは、「子どもの同級生の応援・支援が嬉しく、感謝している。」と松元由香里さんは「ふーちゃんスキスキ、ほっぺスリスリでの愛情表現」など、それぞれのお子様の誕生から現在までの歩みの報告があり、親として深く共感し、そして今後も頑張らねばと勇気付けられることでした。

研修Ⅱの「職員からのメッセージ」では、川内自興園の支援員兼サービス管理責任者堀之内 満さんから、福祉を取り巻く環境の変化、わたくしたち職員の思いとして、「親なきあとの相談や家族の皆さんが日ごろ感じている『思い・悩み・希望』に常に耳を傾け、常に寄り添う立場であることを強く認識し、その声に『誠心・誠意』を持って一緒に考え、前に進み、心から笑顔を導けるように努めたい。」などと話されました。

特に、親元を離れて生活している利用者や家族などへご配慮をされていることが分かり、家族として安心しました。また、「グループディスカッション」では、23のグループに分かれ、施設の職員、家族と日ごろに思っていることを遠慮なく出し合って、家族会の行事、施設への要望など多面的に意見交換が行われ、家族会員は心穏やかに清々しい気持ちになりました。

講演Ⅰでは、「本人中心の支援のあり方」～今、もとめられているものは？～と題して、東洋大学社会学部福祉学科長・教授 高山直樹氏の講演がありました。

高山教授の講演の中で、特に、1つ目は「津久井やまゆり園事件」の植松被告の考え方が、施設に勤め、利用者と接する中で、徐々に必要ないと思った優生思想や内なる差別を持つようになって、その内にナチス・ドイツの「優生思想」に共感したこと。2つ目は、重度の脳性マヒの山田康文さんが、14歳当時詠んだ詩の一節に「ぼくを背負うかあさんの 細いうなじにぼくはいう ぼくさえ生まれてこなかったら かあさんのしらがもなかったらうね ありがとう息子よ あなたのすがたを見守って お母さんは生きていく ありがとうおかあさん やさしさこそが大切で そんな人の生き方を 教えてくれたおかあさん」とあり『ありがとう』で紡いでいますと話されたときは、わが子、兄弟・姉妹等とダブリ目頭を熱くしました。3つ目は、「社会モデルとは？」、障害って何？ 障害はどこにある？ として、買い物に出かけた車いすの人がお店入り口の階段に遭遇した。はて障害は「階段」、バリアフリーにすれば車いすの人もベビーカーの親子もスムーズにお店に



入れる。洋服を買うときに店員さんが車いすのお客さんと付き添いの人に「で、洋服のサイズは？」、何か問題はありますか？ 店員さんは車いすの本人を無視し、無意識に先回りしている。「真正面から向き合うことを忘れていないか」。さらに意思決定支援について、「どんなに障がいの重い人でも意思決定はできる。それは程度の問題であり、周囲の配慮で開発できる。」等と話されたことが印象に残りました。

これまで、我が子らの成長を見守りながら「我がままは、子らの意思決定」と気づかされました。最後に「息子や娘には、兄弟・姉妹には、こんなに素晴らしいところがあると言い続けて誉めてもらいたい。」と結ばれました。

研修会の最後は、「偉人達の家族にちなんだ物語」では、鹿児島市在住のNPO法人まちづくり地域フォーラム・かごしま探検の会・代表理事東川隆太郎さんの講演を拝聴し、西郷隆盛さんが家族や知人に宛てた手紙、坂本龍馬から届いた手紙等々を紹介しながら西郷隆盛の生い立ちから両親始め兄弟・姉妹・家族、伴侶、友人・知人思いの人柄などを話されました。誰だって、いつの時代でも、それぞれ人知れず悩みや思いを持って生きているのであり、我々家族も悩みはつきないが、ときには、子どもや兄弟・姉妹そして主人や奥さん宛に手紙を書いてみたいという気持ちになりました。

まだ参加されたことのない会員のみな様も、是非一度は参加してほしい貴重な研修会です。



## 令和元年度 県家族会連合会研修会開催 ～ 全施連副理事長南守氏による「地域共生ホーム」の講演 ～

令和元年11月8日（金）、ハートピアかごしまにおいて、8月に全施連が発刊した「地域共生ホーム」に基づき、全施連副理事長の南守氏を招き、地域共生ホームに掲載されている内容について解説等を頂きました。南氏は、同本の著者でもあり、高知県において「あじさい園」という施設の理事長であります。第3章「職員の専門性の向上と待遇改善を求めて」、第5章「施設経営と運営のあり方について」と付録の「施設の暮らし点検シート」を担当されており講演されました。

今回は、家族会員をはじめ、鹿児島県知的障害者福祉協会、鹿児島県手をつなぐ育成会、鹿児島県議会議員の方々に声かけしたところ、知的障害者福祉協会の水流純大会長、手をつなぐ育成会花木千鶴理事長、県議会議員鶴丸明人氏など約100名が参集し、南副理事長の講話を拝聴しました。

南副理事長は講演の中で「現在の障害者総合支援法等に基づき利用者の幸せを求めるためには、家族会どうあるべきか。家族会と施設側は対等にものを言い合える関係を構築しないといけない。福祉施設の職員不足が言われているが、職員は利用者を理解し、実践することにより利用者の幸せへの理解を深めなければならない。施設職員は、自ら利用者を幸せにするためにはどうあるべきかを考えて仕事をすれば良い結果が生まれてくる。家族会も職員への労いの言葉を忘れてもらいたくない。」を強調されました。南副理事長の講演を聴き、家族、利用者及び施設、特に職員との関係はどうあるべきか。日ごろの思いを遠慮なく、かつ素直に話すことで家族と施設の関係も良好に行くのではないかと安堵した気持ちになり、これからの家族会活動を更に充実しなければ